

生産者情報コーナー

一層役立つ情報となるよう、生産者の皆さんの実践状況や情報を記載して欲しいという意見がありましたので、前回から生産者の皆さんからの情報を載せるコーナーとしました。より充実した内容とするためには皆さんからの情報提供が必要ですので、どしどしお寄せください。また、疑問・質問も沢山出して頂きたいとおもいます。

今回は腰越 **滝沢勝さんのストック栽培** についての情報です。

防除をできるだけ少なくしたいとの考えから、ハウスのサイドをサンサンネットで覆い、栽培期間中のコナガの侵入を防ぎ、播種時期を通常の秋作より遅らせて、11月～12月にかけてゆっくりと出荷する方法をとっています。

- 作型：播種を8月中旬まで遅らせて、11月～12月の切花の不足する時期に出荷する作型
- 品種：品種は4色（白、淡いピンク、濃いピンク、紫）このくらいの色のバリエーションが出荷では欲しい。
- 播種日：8月16、17日 定植：9月6日 初切り10月31日（ピンク）11月13日（白）

1. 育苗

播種日は、白が8月16日、他の色は8月17日。（白のほうが遅く咲く為一日早く蒔く）
播種床は、ビニールをひいた上に5～6cmの床土を乗せてそこに蒔く。（根が深く入ると軟弱徒長するためにビニールをひく）種はすじまきにし、発芽後は上からの灌水はしないで、乾燥したらヤカンで苗の間に軽く水をやる。

2. 八重鑑別

通常だと、一重と八重咲きの苗が半々に混ざるので、八重咲きを残し、一重の苗を捨てる。最初の鑑別は遅く発芽するものを取り除き、定植時にも行なう。但し、直売で売るには一重でも売れるのである程度一重が混じっても気にしない。

3. 定植

3間幅のハウスに1m幅の畝を3条つくり、定植前に12cm×8目のフラワーネットを定植前に張り地面に下ろしておく。このネットの升目の中に植えていく。（30坪で4,000本位）

4. 灌水

栽培期間中の灌水は出来るだけ抑えて、茎を硬く仕上げることを心がける。特に蕾が見え始めたら灌水は極力控える。軟弱な茎に育てると花が咲いたときに頭が垂れ下がる。

5. 肥料

肥料は弱め。以前、前作の肥料を抜くために作ったこともある。稲藁の堆肥を使っているのでも、化成肥料はカリ分のない、8-8-0を30坪あたり5キロ位施肥。追肥は様子をみながらやる。今年は、500リットルのタンクにノルチッソを溶かし（200倍くらい）1回施用。

6. 出荷

今年は10月31日から切り始めたが、今年は暖かかったため、例年よりも10日～14日早い。切花期間も短くなって12月上旬には終了予定。

7. 病虫害防除

育苗時は、サンサンネットで覆う。定植前にはハウスサイドをすべてサンサンネットで覆い、コナガやスリップスの侵入を防ぐ。今年は、播種床にオンコル粒剤を撒き、定植後にトップジンMとノーモルト乳剤を散布した。後の防除は一切なし。

※以下の基準にそって八重鑑別を行います。

発芽が早く、生育がよく、子葉の形が楕円あるいは卵形、葉柄が長く、葉色が薄く、葉縁の刻みが多く、草丈、子葉の面積が大きいもの（櫻井）



花きの作業



【花木のふかし】

12月下旬になると、ボケ、レンギョウ、ユキヤナギ、ウメなどふかしに使われる多くの花木の休眠が明けますので採取してきます。花芽を外側にして5～10本程度に束ね、冷水につけて水揚げをします。(1月頃であれば5～7日)加温ができるパイプハウス内にバケツごと並べ、夜温15℃程度、昼温25℃に加温するとともに、湿度を60%以上となるよう散水します。とくに蕾が割れる時期までは蕾が乾かないようにし、花卉が見え始めたら回数を減らします。温度は、蕾が着色してきたら夜温を低めにします。また蕾がわれたら光を十分に当てて花卉の着色をよくするようにします。ふかしの期間は、入室時期により異なり、ユキヤナギ、レンギョウ、ボケで15日～25日、ウメで15日位が目安となります。(12月～1月処理した場合)

【フクジュソウの鉢づくり】

正月用の鉢植えには、12月上旬ころまでに株を掘り取り、2～3芽に株分けし、赤玉土を敷いた鉢に植え、腐葉土をまぜた用土を芽の半分位まで覆土します。灌水し2～3日は直射日光を避け、活着後は夜温を5～10℃に保ち開花を促進します。



果樹の作業



【リンゴの防除】

リンゴの重要病害である腐らん病菌は、5℃以上になると胞子を飛ばすといわれているので、冬期といえども油断できません。12月にも石灰硫黄合剤の散布を行なって春先までの感染予防を行なってください。また、剪定時には十分点検を行い、病斑があれば必ず削り取りやせん徐をし、傷口や切り口には塗布剤を塗布してください。

【ぶどうの防寒対策】



12月中旬頃までに主幹部を稲わらで厚く巻いて(5cm以上)口元から雨が入らないよう上、中、下をしっかりと縛ります。稲わらが濡れるのを防ぐため反射マルチや白色フィルムで覆うことも効果的です。(黒、透明のフィルムでは内部が高温になりかえって障害を助長するので注意してください。)



農業豆知識

質問コーナー

冬期ハウス内で野菜を栽培していますが、効果的な追肥について教えてください。

昨年10月号のどきどき情報でもお知らせしたように、野菜に追肥する場合、気温の低い冬期間は固体の肥料を土に施用するよりも液体の形で施用したほうが土壌への浸透が早いため、効果の出方が早くなります。また、肥料の窒素分の原料としては、主に硫安、塩安、硝安、燐安、尿素がありますが、施肥してから作物に吸収される早さは硝安>硫安>尿素>塩安>燐安の順であるので、硝酸態窒素を含む肥料の効きが早いということになります。

以上の2点から、冬期間の追肥用の肥料としては硝酸系の液肥を使用すると早い効果が期待できます。JA系統で販売している肥料としては、窒素単体でなく他の成分も含まれた「くみあい硝酸石灰苦土入液肥」があります。使用方法は、ハウス内では500倍以上の濃度で、1回の施肥量はN成分で50g～100g/100㎡程度とし、生育の状況をみながら必要であれば10日おきに施肥します。

なお、固体の肥料を追肥につかう場合も、硝安が入った「わかみどり」を使用するのがよいでしょう。この場合も施肥量はN成分で50g～100g/100㎡とし、施用した後にはたっぷりと灌水をしてください。液肥の散布、灌水とも午前中に行なってください。但し、硝酸態窒素は、土壌に吸着されないため流亡しやすいのも特徴です。過剰に施肥すると肥料の無駄になるばかりでなく、環境にもよくないので、生育をみて必要な場合のみ施肥してください。

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
櫻井主任企画員 (Tel 25-7157)